

利根・沼田の教育

発行所 利根教育事務所
発行人 永島 芳信

〒378-0031 沼田市薄根町 4412 番地
TEL 0278-23-0165 FAX 0278-23-0180

自律した学習者が描く、未来の社会

利根教育事務所長 永島 芳信

「社会をつくるのは、私たち」 — 昨年度、ある学校の公開授業で出会った中学3年生のこの言葉が、今も心に深く響いています。

この発言は「総合的な学習の時間ワークショップ」の中で、だるまをテーマに探究活動をした生徒から語られたものです。活動のきっかけは、身近にあるだるまのすばらしさが、若い世代や地域の人々に十分に伝わっていないという危機感だったといいます。当該生徒はまず、だるまの歴史や魅力を徹底的に調べ、その成果を形にするために、一冊の絵本を書き上げました。完成した絵本は子ども図書館で親子を対象に読み聞かせを行い、地域の中にだるまを通じた温かな交流の輪を広げていきました。

私が何より感動したのは、この活動で得た生徒自身の心の成長です。伝統文化を深く掘り下げ、実際に社会と関わる学習の中で、「社会をつくっていくのは、他の誰でもない私たち自身なんだ」という強い当事者意識を抱くに至ったといいます。さらに、この生徒は未来への志を次のように語ってくれました。

「将来は、社会を支える人として、学校の先生になりたいと考えています。そして、私と同じように『自分たちの手で社会を担っていこう』という思いをもった子を育てたいです。そのために、今、一所懸命に勉強しています」



この言葉こそ、教育ビジョンで目指している「自律した学習者」の姿だと確信しま

した。自律した学習者とは、単に知識を習得するだけの人ではありません。自ら問いを立て、試行錯誤を繰り返す、よりよく生きるために責任をもって学び続ける人のことです。さらに言えば、そうして得た学びを自分一人のものにせず、社会をよりよくするために役立てようとする主体性をもった人のことだと考えます。

「社会を担う子を育てたい」という夢をもった生徒は、自らの学びを追究すると同時に、社会の担い手として力強い一歩を踏み出していました。夢は「目を輝かせて学ぶ」エネルギーになること、子供たちが秘めている無限の可能性、そして、学びがもつ豊かさを教えてもらった、忘れられない授業公開となりました。

子供の学びを支えた3年間の取組の成果 (R5~R7)

非認知能力育成に向けたモデル校による実践研究 ～9年間を通じた非認知能力の育成を教育活動の基盤に～ (川場学園)

○様々な場面で、教職員が共通した3つの言葉掛けにより、子供の思いや背景を大切に環境の構成を工夫しています。

「どうしたの？」	子供の思い・背景を受け止める ・まず気持ちに寄り添い、何が起きて いるかを一緒に確かめます
「どうしたいの？」	自分の意志・主体性を引き出す ・問題を「自分事」として捉え、自ら解 決策を考える力を育てます
「何かできる ことはある？」	自己決定を促す(教師との協働) ・子供が決定する場を保障します

◇ ポイント ◇

3つの言葉掛けが、子供の「自分で決める力」を育てます。言葉掛けは、最もシンプルで、直ぐに実践できるツールです。全教職員の共通理解と共通実践の下、子供の思いを尊重し、寄り添う姿勢が、非認知能力の育成につながります。

※今年度中に県内の実践等をまとめ、群馬モデルとして群馬県教育委員会のWebページに掲載予定です。

発達障害のある児童生徒等に対する支援事業 「効果的かつ効率的な巡回指導の実施に向けたモデル構築事業」 (沼田中)

- 管内全ての中学校で通級による指導が実現可能になったことで、切れ目のない支援が実現しました。
- 連携協議会・研修会・授業研究会の実施で、担当者の専門性が向上しました。
- 拡大巡回担当者会議により、通級担当、特別支援教育コーディネーター、学級担任の連携体制を各校で整備しました。
- 大学講師、スーパーバイザーを招いた研修で、管内全ての中学校において特別支援教育全体への理解が深まりました。

◇ ポイント ◇

「自立活動」での学びを通常学級の指導に生かすことが、インクルーシブ教育にもつながります。

※今年度も各種協議会や研修会を計画的に実施しますのでご参加ください。

また、これまでの取組や通級による指導に係る資料等を参考に、指導に生かしていきましょう。

令和8年度 授業と学級づくりのポイント

学習指導

(考える流れが起点)

自律した学習者

子供たちの学びを支える「両輪」



学級経営

(安全・安心な環境)

児童生徒の思考をつなぐ単元づくり

「何を教えるか」より「どう考えていくか」
「教える順番」ではなく、「考える流れ」が設計の起点です。

問いが深まる構造

< 「考えたくなる問い」の設定 >

- 最初の気付き・素朴な疑問からスタート
- 各時間のめあてとつながる問いを設定し、学習を通じて、問いが更新・深化していく単元構想を意識する



「個人・協働・全体」の組合せ

< 場の使い分けで深める >

- 一人で考える場 ⇄ 対話で広げる場 ⇄ 全体で方向付ける場
- これらの場を目的や児童生徒の状況に応じて使い分ける



「主体的・対話的で深い学び」へ

< 主体的に学びを調整する >

- 「見通し→追究→振り返り」の流れ
- 単元にこのような流れを位置付け、振り返りを意味付け・価値付けし、次の問いにつなげる

◇ 学級経営の基盤となる教師の姿勢 ◇

- 「結果」より「過程」を価値付ける
- 「挑戦」したことを大切にする
- 振り返りで「次につながる問い」を残す

※教師が細かく指示しすぎないこと、うまくいかない時も、すぐに正解を与えずに「見守る」ことを意識しましょう

心理的安全性のある環境づくり

自己存在感の感受

「自分がここにいい」
・役割をもち、協力して活動する場面を意図的に設ける

安全・安心な風土の醸成

「ルールが安全・安心の土台に」
・子供と一緒にルールや決まりを考える

共感的な人間関係の育成

「あなたのことが分かった」
・教師は結論を急がず、児童生徒の気持ちを言語化して返す

自己決定の場の提供

「自分で選んで動く」
・失敗や迷いも含めて自分で考えて、選び、決める経験を設ける

雪遊びを考える話合いの例



雪合戦をしたいです。体を使って遊びたいです!

私は、走る事が苦手だし、雪玉を当てられるのが怖いです。



雪合戦だけではなく、他に何かできないかな?

みんなでかまくらを作るのはどう? 走らないし、協力もできるよ。



雪合戦をした後で、かまくらを作るのもいいと思います。

それなら、私も参加したいです! 雪遊びが楽しみです!



◇ インクルーシブな学びの場へ ◇

誰もが参加できる場の設定や、多様な意見や少数意見を認め合ったり尊重したりするインクルーシブな環境が、一人一人の自己存在感を育てます